

はじめに

「大学入試の英語が4技能化」というニュースが流れたのは、二〇一七年の七月のことでした。しかし、世間では大きな反応もなく、せいぜい塾などが「いよいよ4技能、あなたは大丈夫？」といった広告を出したくらいです。

多くの人にとり「4技能」は意味不明でした。というより、意味はわかるけど「だから何？」という反応でした。英語教育にたずさわる人ですら、「何が変わるの？」という反応が大きかったようです。

しかし、変化は確実に訪れつつあります。「4技能」という看板をいわば大義名分にして、大学入試の英語はいまや民間化されようとしています。推進者たちは「いずれは国立大学二次試験の英語を全廃して、すべて業者試験に置きかえよう！」とさえ言っています。その結果、中等教育や高等教育にも大きな影響がおよぶ。

数年後に受験期を迎える家庭は、すでに形のないもやもやした不安に直面しているでしょう。いったい何が起きるのか、よくわからない。いや、実際この政策にかかわった方々も何が起きるのかよくわかっていない。政治家の発言をよくみると、彼らが英語や試験システムについて驚くほど無知であることがわかります。新しく導入するテストなど、見たこともないという人がこの案を前に進めました。ついに日本はここまで来たか、と思います。

他方、この混乱を好都合だと思っ人たちもいます。「4技能」が謎であればあるほど、けっこうだと思っ方々。しかも、政策を推進する人たちは、不安をあおるかのようにな間違った情報を流しつづけています。

本書の目的は、嘘と矛盾に満ちたこの政策を検証してその中止を訴え、また、その大もとにある古い古い「べらべら英語幻想」がいかに時代遅れであるかを示すことにあります。「4技能? 何それ?」と思っている方々には、是非本書をめぐっていただき、その実情を理解していただきたい。

政策の管轄は文部科学省です。一般の方の中には、「優秀な官僚が策定した政策だから、間違っていないのだろう。是非、従おう」と考える人もおられるでしょう。私もそう思ったいところですが、その一方で、「国はおかしな政策ばかりする。けしからん」と憤る人もいます。

しかし、私はこうした「国」とか「文部科学省」といつたとらえ方をいつたんやめにしたいと思っています。政策には、政治家にせよ、官僚にせよ、必ず中心的な推進者がいる。また役所の外から呼ばれて仕事をしている人もいる。「国」とか「文部科学省」といつた抽象的な主体がいるわけではなく、一人ひとりの人間がことを動かしているのです。いつた誰がどうやって、こういう政策を導入しようとしているのか、そこにはどんな意図や、どんな誤解や、どんな嘘があるのか。そこを見たい。

文部科学省にお勤めの方は、私の知る限り、みなさん志が高く、聡明で信頼できる人ばかりです。残念ながら今回の政策担当者とは面識はありませんが、きつと頭のいい方々でしょうから、理を尽くして説明すれば言ったいことが通じるのではないかと期待しています。

この本の第一の目的は英語政策の批判的な検証ですが、同時に言葉について、また英語という言語についての考察も行います。適切な勉強法の提案や、言語学習との向き合い方について述べている章もあります。そういう意味では、多少なりと英語に関心のある方にも是非読んでいただきたい本なのですが、何より、国の政策を準備する方々には手にとつてほしい。誤つた政策があれば変更する「力」のある方々が、ここに書かれてることを読んでいつたいどうお考えになるか知りたいです。